

青陵

第 162 号

二〇二二年三月二五日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者 水野敏典

大和四号墳出土鉄鉾が語る新羅との関係

平井 洸 史

一、はじめに

古墳時代社会を明らかにするうえで、鉄製品の研究が重要な成果を挙げてきたことは多くの研究者が認めるところである。とくに、古墳時代中期の畿内大型古墳群の鉄製品については、ヤマト王権中枢の一樣相を物語るものとして注目され、関連研究も蓄積されてきた。しかし、調査年代の古い事例も多く、現在の研究水準に照らし合わせると情報として不十分な点があることは否めない。とりわけ、佐紀古墳群の鉄製品については、戦前から戦後間もないころの出土資料も多く、必ずしも十分に評価がなされてきたわけではない。本稿では、そうした課題への一つの足がかりとして、大和四号墳より出土した鉄鉾を取り上げ、資料の紹介と評価を行いたい。

二、資料の紹介

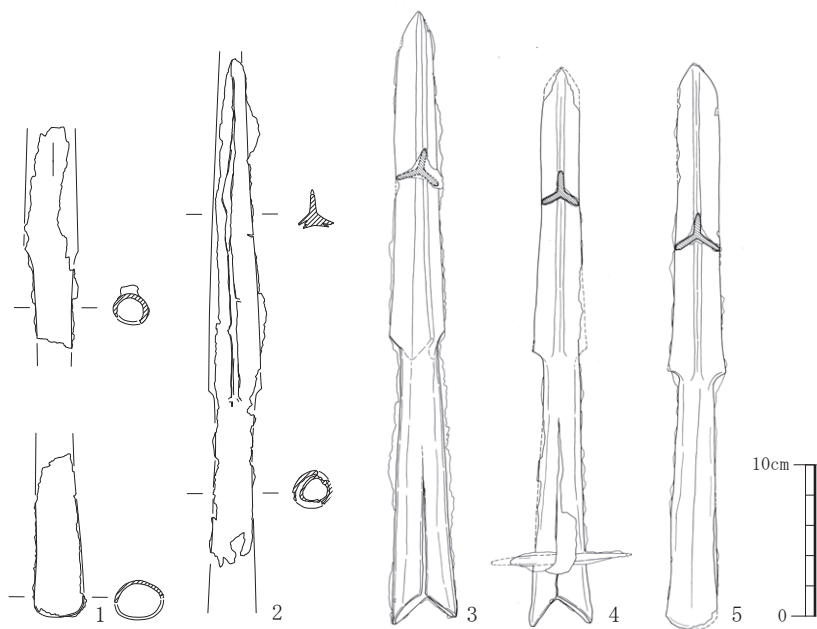
大和四号墳は、奈良県佐紀古墳群東群のウワナベ古墳北西に立地し、論者によっては、ウワナベ古墳の陪塚として評価される古墳である。昭和一六年に「建築」のため墳丘が削りとられた際に、滑石製品、鉄剣、鉄鉾、鉄鏃、U字刃先、鉄斧などが出土しており、それらは『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第四輯（以下『抄報』）にて報告がなされているが、今日評価するにあたり明確な点も少なくない。そこで、現在宮内庁書陵部が所蔵するそれら鉄製品のうち鉄鉾二点の観察および再実測を行った。以下、その所見を述べる。

鉄鉾1（図1・1）は、身体を含む破片と、袋部端を含む破片に分離している。前者は残存長一四・七cm、

目 次

大和四号墳出土鉄鉾が語る新羅との関係
朝鮮半島三国時代の土器床について
中国陕西省への派遣を終えて
附属博物館関連展示案内

平井 洸 史
絹 晶 歩
鈴 木 一 議
編 集 部 8
6 3 1



1・2：奈良県大和四号墳、3～5：韓国 皇南大塚南墳副柳
筆者実測 慶州文化財研究所編 1993 から転載

図1 大和四号墳出土鉄鉾と類例 (S=1/5)

残存身部長八・一cm、残存袋部長六・六cmを測り、後者は残存長一〇・九cmである。図1・1と2は袋部端の形状と『抄報』掲載図から同一個体

であると考えられる。欠失部位を勘案すると、全長三五cm以上の個体であったと推測される。袋部の断面形は大和四号墳の築造時期である古墳時代中期中葉に一般的な円形であり、関部付近まで中空となっている。身部は薄く剥離しているものの、鎬が認められることから断面形は菱形であったと推測されよう。袋部端は中期に一般的な山形抉りを有する。現状では確認できないものの、『抄報』掲載面を見る限り袋部の長さが長いこと、関幅が推定三・〇cm以上と広いことから、『短身式』(高田一九九八)の大型品であると推定される。

鉄銚2(図1・2)は、残存長三・三cm、残存身部長二・五cm、残存袋部長一〇・八cmを測る。残存部位のプロポーションと類例から、身部長が袋部長に比して長い「長身式」(高田一九九八)と判断される。先端を大きく欠損しており『抄報』報告時の形態を踏まえると四〇cm以上の全長であったと復元されよう。袋部断面は円形である。

そして、当例の最大の特徴としては、三翼鏃に似た刃部の断面形状が挙げられる。この点はすでに『抄報』でも触れられていることであるが、今回の実見を通して再確認するに至っ

た。欠損と鏹彫れのため一目瞭然とはいかないものの、残存部位の屈曲角度から判断することが可能である。断面をみると、三方向にのびる三つの刃が均等な角度で分かれているのではなく、一六〇度ほどに大きくひらく箇所もみられる。

三、類例とその性格

以上二点の鉄銚について、現在までに蓄積された研究成果に照らし合わせるといかなる評価ができるだろうか。

まず、鉄銚1・2については、短身式のプロポーションに袋部の山形抉り、中空部分の深い袋部、明確なナデ関など、列島内で古墳時代中期前葉～中葉に多くみられる特徴を有す。こうした特徴を併せもつ鉄銚の一群は、「金官加耶系」と評価されることもあるが(朴一九九五)、新羅・加耶などの嶺南地域に広くみられるものである。そして、とくに袋部の長い短身式で全長三五cmを超える大型品の出土古墳となると、列島内では福岡県井出ノ上古墳、京都府産土山古墳、兵庫県茶すり山古墳など、甲冑や長持形石棺など王権中枢との関係を示す遺物に加え、半島系遺物の出土が顕著にみられる古墳が多い

傾向にある。

一方、鉄銚2のように三翼鏃同様の断面形を呈する鉄銚(以下「三翼銚」と呼称)は、列島内ではまだ類例をみず、朝鮮半島に類例を求めても、四世紀後半の集安禹山三二九六号墓例と五世紀中葉の新羅王墓である皇南大塚南墳例(図1・3・5)が挙げられるに過ぎない。この種の鉄銚は三翼鏃とのおなじく高句麗から新羅への伝播が推定されるものであるが(齊藤二〇一三)、新羅地域内においてもほかの例をみず、皇南大塚南墳に集中的に副葬される点は、時間・空間的に極めて強い限定性をもった器物であることを示している。

皇南大塚南墳の鉄銚については、齊藤大輔が指摘するように、規格性の高さとその多量副葬の様相などから、新羅の王権膝下での生産が十分に考えられる(齊藤二〇一三)。三翼銚は、そうした環境で短期間に製作されたものの定着しなかった儀仗的な銚として位置付けられよう。この点は、新羅の特徴的な銚として定着した鏢付銚と異なる。

四、三翼銚の出土意義

そのように時空間的に限られた三翼銚が、日本列島内の一円墳より出

土する状況は特殊といえよう。しかし、皇南大塚南墳と、大和四号墳および主墳の可能性のあるウナバ古墳がともに五世紀中葉と时期的に近い関係にある点、そして佐紀古墳群がヤマト王権中枢の墓域である点を踏まえれば、その特殊な状況には何らかの関係を読み取るべきであろう。同時期の類例が皇南大塚南墳にのみ認められる状況を重視すれば、それは、新羅王権中枢からヤマト王権中枢へのモノの移動を示しており、王権中枢どうしの交流を物語る資料としてみることができるのである。

佐紀古墳群出土の鉄製品としては、大和四号墳の耳部幅に比べ刃部幅の広いU字刃先や、大和五号墳の木芯鉄板張輪鐙(諫早二〇一一)、大和六号墳のミニチュア農工具(坂二〇〇五)など、半島関連器物の初期の導入事例が数多くみられる。そのなかでも特に取り上げられるのが鉄鋌である。大和六号墳の鉄鋌についてはその形態から洛東江下流域(咸安・昌原・金海・東萊)との関係を重視する意見(東一九九九)と、新羅との関係をみる意見(朴二〇〇七)があり、特に後者は本論との関連において注目すべきである。ただし、鉄鋌の形態的属性から地域性を抽出す

ることに懐疑的な意見もあり（成・孫二〇一二、土屋二〇一七）、いまのところ議論の決着をみていない。

このように、佐紀古墳群の鉄製品については、渡来系の要素が多く認められるが、各器物の故地や系譜について嶺南地域や朝鮮半島南東部といった地域が挙げられるものの、さらに絞り込むことはできない状況にあった。そうしたなか、本稿で再評価した大和四号墳の鉄銚は、新羅中核との交流の可能性を示すという点において出土意義は大きく、佐紀古墳群の被葬者集団、ひいては王権中核の対外交流の実態を明らかにするうえで重要な資料と位置付けられよう。

本稿をなすにあたり、資料調査において下記の機関、諸氏にご配慮いただきました。記してお礼申し上げます（敬称略）。

宮内庁書陵部 横田真吾・土屋隆史

註

(1) とくに刀剣類については計測値の記載がなく、実測図にスケールも付されていない。

(2) 大和四号墳の時期については鉄銚および農工具の形態、刀剣の組成

を推定根拠とした。

(3) 皇南大塚南墳の被葬者として、奈

勿麻立干（在位…三五六～四〇二）

説と、訥祇麻立干（在位…四一七

～四五八）説があるが、馬具研究

の成果から後者とする立場（諫早

二〇〇八）を踏襲する。

参考文献

東 潮一九九九「鉄銚の基礎的考察」『古

代東アジアの鉄と倭』淡水社

諫早直人二〇〇八「古代東北アジアにお

ける馬具の製作年代―三燕・高句麗・

新羅―」『史林』九一卷第四号 史学

研究会

諫早直人二〇一二『東アジアにおける騎

馬文化の考古学的研究』雄山閣

齊藤大輔二〇一三「皇南大塚南墳副塚出

土鉄銚の系譜」『福岡大学考古学論集

2―考古学研究室開設二五周年記念

―』福岡大学考古学研究室

末永雅雄編一九五〇『奈良県史蹟名勝天

然記念物調査抄報』第四輯 奈良県史

蹟名勝天然記念物調査委員会

高田貫太一九九八「古墳副葬鉄銚の性格」

『考古学研究』第四五巻第一号 考古

学研究会

土屋隆史二〇一七「第5節 出土遺物研

究史―鉄製品を中心として―」『宇和奈辺陵墓参考地旧陪家ろ号（大和6号

墳―出土遺物の整理報告―』宮内庁

書陵部陵墓課

朴天秀一九九五「渡来系文物からみた伽

耶と倭における政治的変動」『待兼山

論叢』史学篇二九号 大阪大学文学部

朴天秀二〇〇七『加耶と倭 韓半島と日

本列島の考古学』講談社

坂 靖二〇〇五「小形鉄製農工具の系譜

―ミニチュア農工具再考―」『考古学

論攷』第二八冊 奈良県立橿原考古学

研究所

韓国語文献（日本語表記で記す）

成正鏞・孫スイル二〇一二「鉄銚をつう

じてみた古代の鉄の生産と流通」『韓

半島の製鉄遺跡』（財）韓国文化財調

査研究機関協会

慶州文化財研究所編一九九三『皇南大塚

Ⅱ（南墳）発掘調査報告書』文化財管

理局 文化財研究所

朝鮮半島三国時代の土器床について

絹 畠 歩

一．はじめに

古墳時代の日本列島には、須恵器を破砕、あるいは完形のまま古墳の埋葬施設内の床面に敷き、その上に遺体を埋葬した事例がある。このような事例は「須恵器床」と呼称され、古墳時代後期、六世紀後半から七世紀初頭にかけて島根県東部地域を中心とした山陰地域と広島県山間部地域に偏在することが明らかとなっている（今西一九九四・脇坂一九九九）。

一方、朝鮮半島でも三国時代の埋葬施設において、日本列島の事例と同様のものがあることを確認した。本稿では、これまで研究対象として言

及されてこなかった朝鮮半島三国時代における土器を埋葬施設に敷いた事例を、日本列島の例に倣って「土器床」と呼称する。そしてそれらの様相を紹介し、日本列島における須恵器床との比較を行う基礎資料とすることを目的とする。

二．朝鮮半島の土器床（図1）

集成の結果、朝鮮半島において土器床を四遺跡一二例確認した。以下遺跡ごとに紹介したい。

羅州伏岩里三号墳三号竪穴式石槨墓

（国立文化財研究所二〇〇一）

全羅南道羅州広域市伏岩里に位置

する。横穴式石室や豪華な副葬品などから、当時の在地首长層の墳墓であったと考えられている。土器床を検出した三号石槨は長さ一・七m、幅〇・五mである。副葬品としては耳環、蓋杯五点、直口短頸小壺二点が出土している。土器床は複数の大形甕が破碎されて敷かれていた。竪穴式石槨北側は大きめに破碎された甕片が配置されていた。石槨の年代

は副葬品の土器の年代観から五世紀末～六世紀初頭に位置付けられる(徐賢珠二〇〇六)。

高敞中月里箱式石棺墓(圓光大学校馬韓百済研究所一九八四)

全羅北道高敞中月里に位置する。周囲には他に古墳は確認されておらず、単独のものと思えられる。墳丘は検出されておらず、不明である。埋葬主体部である箱式石棺は

東西方向を向いており、長さ二・〇八m、幅〇・五mである。副葬品として完形の広口鉢と短頸壺が出土している。

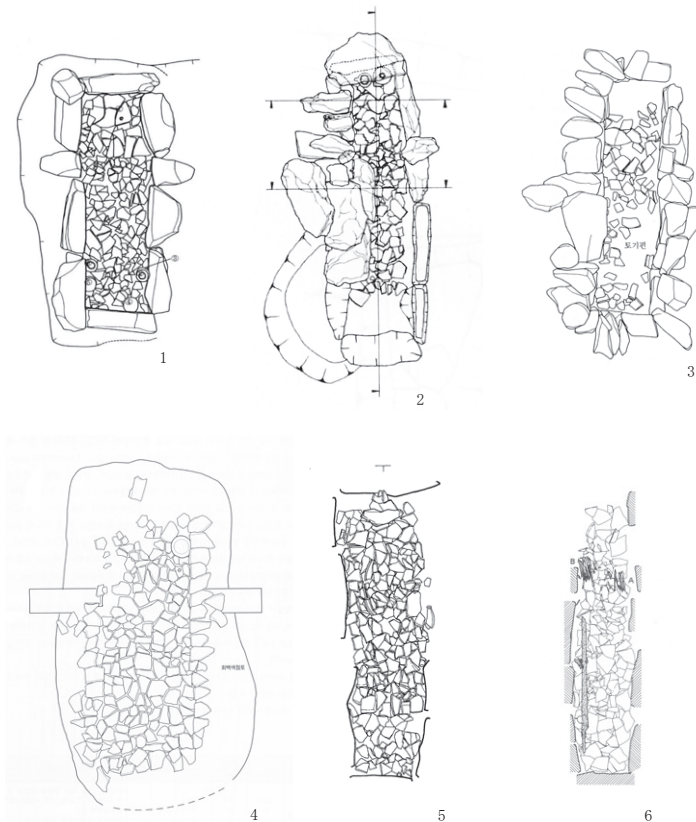
土器床を構成する土器は西端の一部を除いて、ほぼ全面にわたって破碎された状態で敷かれていた。破碎されていた土器の器種は甕であり、複数個体が破碎されていた。西端部分が被覆されていないことは、墓造

成当初からの施設ではないためか、あるいは墓材を搬出しようとするときに破壊したものか、明確ではない。また、箱式石棺の北西数m地点では土器窯址が検出されており、屍床に用いた土器はここから持ち込まれたものと考えられている。時期は、土田純子の編年(土田二〇一七)を参考にすれば、泗泚期百済(六世紀中葉以降)に属するものと考えられる。

長水三顧里四号竪穴式石槨墓(群山大学校博物館一九九八)

全羅北道長水郡三顧里に位置する。長水三顧里古墳群は全一九基が調査された。埋葬施設は全て竪穴式石槨である。三つの支群に分かれており、土器床を検出した四号墓は「カ」地区に位置している。「カ」地区は斜面に位置しており、合計九基の石槨墓が検出されている。四号墳は「カ」地区の南側傾斜面中央に位置する。

竪穴式石槨の規模は、東西長一・八七m、南北幅〇・五九mを測る。石槨の床には多様な灰青色陶質土器片が東壁から内側に〇・二mまでの空間を除外した全面に敷かれていた。これらの土器片は古墳に副葬された土器よりも厚みが厚く、大形土器片が主であり、実用したものを利用し



- 1: 羅州伏岩里3号墳3号竪穴式石槨墓(国立文化財研究所2001)
- 2: 高敞中月里箱式石棺墓(圓光大学校馬韓百済研究所1984)
- 3: 長水三顧里四号竪穴式石槨墓(群山大学校博物館1998)
- 4: 羅州五良洞8号墳(国立羅州文化財研究所2011)
- 5: 兵庫県姫路市西脇75号墳(兵庫県教育委員会1995)
- 6: 岡山県総社市すりばち池古墳群1号棺(総社市教育委員会1993)

図1 朝鮮半島と日本列島の土器床(S=1/60)

たと見られる。土器床に使用された土器片の他に副葬品は出土していない。この土器片のみでは時期不明であるが、他の古墳から出土した土器の年代から、古墳群自体の年代が五世紀末葉から六世紀初頭と考えられている。

羅州五良洞古墳群（国立羅州文化財研究所二〇一一・二〇一七）

全羅南道羅州広域市五良洞に位置する。先述した伏岩里古墳群からは栄山江を隔ててすぐ対岸に位置する。二次調査と七次調査で一一基の古墳が検出されているが、そのうち九基で土器床が発見されている。他の例とは異なり、すべて破砕された甕棺片を利用しており、特に一号墳と八号墳は櫛となる部分まで石材の代わりに甕棺片によつて構築されており、報告書では「竪穴式甕櫛」と呼称されている。他は残存状況が悪いものが多いが横穴式石室とされる。副葬品として土器が出土している。古墳群の時期はこれらの土器の年代から六世紀中葉～後葉と考えられる。この古墳群のすぐ近くに甕棺を焼成した窯である五良洞窯跡群が所在し、その操業時期は五世紀後葉～六世紀前葉と考えられる。したがって、五良洞古墳群は五良洞窯跡が操業終了

約半世紀後に構築されたと考えられる。そして古墳内に敷かれた甕棺片は古墳構築時のものではなく、約半世紀前に焼成され窯跡周辺で破片となっていたものを再利用したと考えられている。

小結

少数例の紹介ではあるが、朝鮮半島の土器床についてまとめた。

時期は、伏岩里三号墳と三顧里四号墓が五世紀末から六世紀初頭、中月里箱式石棺墓が六世紀中葉以降、五良洞古墳群が六世紀中葉から後葉であり、五世紀末以降であることがわかる。また分布は、栄山江流域などの南西部地域に偏る傾向があるものの、類例が少ないため、これ以上踏み込むことは避けた。また、土器床としては、複数の大形甕を破砕して使用しており、甕棺片を使用した五良洞古墳群も「甕」を使用しているという意味では同様であるといえる。また、中月里箱式石棺墓と五良洞古墳群例は、近隣の窯から破片が持ち込まれたと考えられており、被葬者像を考える上でも重要である。

三、日本列島例との比較

最後に日本列島の土器床との比較を行いたい。日本列島では中国地方

に事例が集中しており、日本列島の古い段階の土器床としては、兵庫県姫路市西脇七五号墳（六世紀前半）や岡山県総社市すりばち池古墳群一号棺・三号棺（六世紀前半～中葉）などがある（図1）。西脇七五号墳例の須恵器床を構成している須恵器は近隣の灰原から持ち込まれた複数の甕片で、五世紀後半から六世紀初頭の須恵器を六世紀前半ごろに使用したと考えられている。また、近隣の窯跡から須恵器が持ち込まれた可能性がある事例として、島根県松江市池ノ奥二号墳（七世紀初頭）や岡山県瀬戸内市寒風古墳（七世紀後半）などがある。六世紀後半以降、島根県東部地域と広島県山間部地域で多くの事例が存在する。これらの中には、複数の甕片を破砕・使用するものと、完形の蓋杯・杯身敷き詰めるもの、両者を複合したもの大きく三種類が認められる（今西一九九四・脇坂一九九四）。

このように、甕を複数破砕して使用するタイプが多いことや近隣の窯から須恵器が持ち込まれた事例があることなどは、朝鮮半島の事例と共通する。一方で、完形の蓋杯を使用する事例が一定数存在することなどは異なる点と言えよう。

四、おわりに

朝鮮半島の土器床を紹介し、若干の検討を行ってきた。日本列島の事例と直接的に系譜が繋がるかどうかは、事例数が少ないこともあり、ひとまず保留をしておきたいが、両者の事例に近隣の窯から持ち込まれた事例があることは興味深い。被葬者が窯業に従事した人物、あるいはその管理者である可能性があり、そうであるならば、日本列島の事例は、そのような技術をもたらした渡来人とも関連する可能性もあるだろう。当該時期における列島と半島の交流について、今後さらなる検討を行ってきたい。

本稿は平成二六年度の韓国国立文化財研究所との交換研修、及び公益財団法人由良大和古代文化研究協会平成二六年度研究費による成果の一部である。韓国滞在時には、国立文化財研究所の皆様を始め、多くの方にお世話になった。感謝を申し上げます。

参考文献

今西隆行一九九四「屍床の研究―須恵器床を中心として―」『文化財学論集』文化財学論集刊行会

瀬戸内市教育委員会二〇〇九『史跡寒風古窯跡群』

総社市教育委員会一九九三『すりばち池古墳群』

土田純子二〇一七『東アジアと百済土器』同成社

兵庫県教育委員会一九九五『西脇古墳群』松江市教育委員会一九九〇『松江東工業団地内発掘調査報告書』

脇坂光彦一九九九『横穴式石室の須恵器敷床』『考古学に学ぶ』遺構と遺物』同志社大学考古学シリーズⅦ

同志社大学考古学シリーズⅦ

中国陝西省への派遣を終えて

鈴木 一 議

一、はじめに

筆者は、奈良県国際課の平成三一年度奈良県戦略的専門分野交流事業により、中華人民共和国（以下、中国と略記）陝西省へ派遣された。本事業は、本県が友好提携を締結している海外地方政府に、専門分野に従事する職員を派遣し、専門的技術および知識を習得し、人脈を構築することで、本県政の充実を図ることが目的である。

本事業は、平成二六（二〇一四）

韓国語文献（日本語表記で記す）

圓光大学校馬韓百濟研究所一九八四『高敞中月里文化遺跡発掘調査報告書』

群山大学校博物館一九九八『長水三顧里古墳群』

国立文化財研究所二〇〇一『羅州伏岩里三号墳』

国立羅州文化財研究所二〇一一『羅州五良洞窯址Ⅰ』

国立羅州文化財研究所二〇一七『羅州五良洞窯址Ⅲ』

徐賢珠二〇〇六『梁山江流域古墳土器研究』学研文化社

年度より実施されており、本事業の実施要綱にある専門分野のうち、文化財保護分野に従事する職員として、毎年当研究所の職員が派遣されている。本事業による当研究所の職員の派遣は、今回で六年連続六回目である。派遣先は、中国陝西省で、受け入れ窓口および研修先は、西安市内にある西北大学文化遺産学院（以下、西北大）、主な研修先は、同じく西安市内にある陝西省考古研究院（考古研究院）であった。派遣にあつた

ての研究テーマは、『漢代から唐代の中国と日本の宮殿および都城とその関連遺跡・遺物の比較研究』とし、活動内容として、「漢代から唐代の宮殿および都城とその関連遺跡に関する考古資料の調査」と「各対象遺跡の整備・活用状況の把握」を計画した。派遣期間は、中国の国慶節明けの令和元（二〇一九）年一〇月八日（令和二（二〇二〇）年三月一八日までの一六三日間の予定であった。しかし、後述するように、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、滞在期間は大幅に短縮されることとなった。

二、出国まで

中国派遣の打診を岡林孝作調査部長（以下、役職と所属は平成三一年度当時）から受けたのは、平成三一年の四月中旬であった。その後、所内の担当者である鈴木裕明企画係長の指示のもと、派遣にかかる様々な書類の作成に入った。派遣先とのやり取りも必要とのことで、早急に書類の作成、各種証明書の取得等を進めたが、派遣先から招聘状が届いたのが八月末、最終的に査証の申請許可がおりたのは、出国まで一か月を切った九月上旬であった。

実際に出国日が確定し、航空券が取得できたのは、出国日五日前の一〇月三日であった。航空券の取得に時間がかかったのには、国慶節の影響があった。国慶節とは、「中華人民共和国」の成立記念日で、一〇月一日と定められている。中国では、その前後を挟んで、大型連休となっており、旅行者も増えるため、航空券の価格が上がり、予算に見合う航空券の取得ができない状況であった。

二〇一九年の国慶節は、中国建国七〇周年にあたり、西安市内では、所々で七〇周年を祝う飾り物を目にした。出国日が確定したことを受け、所内の方々に挨拶をし、その翌日に、国際課への挨拶と担当者との打ち合わせをおこなった。出国日前日に、出張伺いの電子入力を終え、ようやく出国の準備が整った。

三、現地での活動

一〇月八日に関西国際空港から日本を出発し、西安咸陽国際空港へは定刻通りに到着した。空港には、以前当研究所で研修された西北大学の孫麗娟氏が出迎えに来てくださった。孫麗娟氏とは、事前に WeChat（微信）というメッセージアプリで連絡を取っていたため、迷うこ

となく会うことができた。

なお、微信は、中国では必携のアプリで、研修期間中の連絡のやり取りでは、常に微信を使用していた。

孫麗娟氏に連れられ、現地での活動拠点となる西北大学構内にある西北大学賓館に到着。現地での活動はじまった。

西北大学では、受け入れ担当である冉万里氏に、大学構内の案内をしていただき、以前当研究所で研修された劉斌氏には、語学研修の手配をしていただいた。

一〇月一四日には、劉斌氏の随行で、主な研修先となる考古研究院へむかい、受け入れ担当である王小蒙副院長と面会し、今後の研修日程が決まった。なお、王副院長との面会日前日に、西北大学文化遺産学院の院長である段清波氏が亡くなられた。段清波氏は、以前、考古研究院にも所属されていたことから、慌ただしななかでの面会であった。

同日、劉斌氏には、考古研究院に隣接する中国社会科学院考古研究所西安分室にもご案内いただき、劉振東氏をご紹介いただいた。その際、以前当研究所での研修中、筆者らに中国語を教えてくださいました郭曉濤氏や付仲楊氏にもお会いできた。その

際は、また会うことを約束して別れたが、結局、それもかなわなかった。さて、現地での活動の概略は、次のとおりである。

一〇月～一月中旬…自己研修

王副院長との面会の際、考古研究院での研修前に、語学研修を進めた方がよいということになった。語学研修は、先述のとおり、劉斌氏に手配していただき、西北大学の大学院生である胡丹陽氏を紹介いただいた。胡丹陽氏には、基本的には土曜と日曜、都合が合えば金曜にも中国語を教えてくださいました。時間は午後の二時間程度であった。語学研修は、最終的に春節休み（二〇一九年は、除夜にあたる一月二四日から一月三〇日まで）直前までとなった。

語学研修がない日は、一日中外を出歩いていた。西安市内は、バスや地下鉄といった公共交通機関がとても便利であったことに加え、目的の地までの経路検索が可能な地図アプリは、知らない土地での一人歩きに大変有効であった。

また、西北大学でおこなわれた考古学関連の講演会や研究会にも参加した。大学内でおこなわれる講演会には、講義の一環のように、毎回多数の学生が参加していた。



写真1 西北大学での研究会の様子
(2019年10月19日)

一月中旬…考古研究院での研修
考古研究院での研修は、十一月八日からじまった。孫周勇院長らとの面会後、実際に研修の手配を担当される業務部の夏楠氏と日程の打ち合わせをおこなった。

考古研究院での研修内容は、筆者の研究テーマにあわせて、考古研究院で実施している発掘調査現場やその周辺遺跡、博物館の見学であった。

当初は、研修日程が定まらず、急な出発や中止があったが、語学研修の日程も考慮していただき、月曜にその週の日程確認と考古研究院内での文献収集や資料整理、火・木曜に現

地研修、金曜に現地研修の資料整理と徐々に日程が定まった。

一月下旬～二月上旬…寧夏回族自治区出張随員

別事業で中国にいられていた岡林部長らの出張に随員させていただいた。期間の前半は、岡林部長と奥山所員と主に銀川、後半は川上課長と大西所員と主に固原で、発掘調査現場の見学や遺跡の踏査、博物館の見学などの調査をおこなった。その際には、寧夏回族自治区文物考古研究所の羅豊氏をはじめ、以前当研究所で研修された馬強氏、馬曉玲氏にお世話になった。

二月上旬～一月中旬…考古研究院での研修

考古研究院での研修が再開され、榆林市、咸陽市、渭南市において、主に発掘調査現場の見学をおこなった。見学の際は、それぞれの現場に併設されている調査事務所兼宿舍に泊まらせていただき、遅くまで遺物整理の状況や調査成果の話などを聞くことができた。

一月初旬には、考古研究院や陝西省における二〇一九年度の発掘調査成果報告会などに参加した。

一月中旬～帰国まで…自己研修
天気の問題などから、考古研究院



写真2 唐代帝陵大遺址考古隊での食事
(2020年1月1日)

の発掘調査現場の見学が困難となったことや春節休みに入ることなどから、再び自己研修となった。そのなかで、考古研究院の邸楠氏が、休みを利用して咸陽市内を案内して下さった。その翌日の一月二〇日に、邸楠氏から湖北省武漢市における新型コロナウイルスのニュースを知らされ、外出を控えるよう忠告された。それでも、まだまだ見学できていない場所が多数残されていたため、自己研修を続けていた。

一月二三日には、日本の外務省からのメールが頻繁に来るようになり、ついに陝西省内でも感染例が確認さ

れた。一月二五日の春節初日に、市内の様子を見て回ったが、人通りはほとんどなく、前日には観覧施設が閉鎖となった。大学も西門からの出入りしかできなくなり、警備員が体温確認をするようになった。一月二八日には、バスが減便。深夜には市を跨ぐバス・タクシースの停止、高速ゲートの封鎖となった。この頃には、周辺の見学は不可能になり、宿舍内で一日中ニュースなどをみて情報収集をして過ごすようになった。一月三〇日には、ついに中国全土で感染例が確認されるに至った。

二月に入ると、大学構内は関係者以外立ち入り禁止となり、いよいよ構外への外出も不可能になった。食事については、構内の食堂が営業していたため問題なかったが、食堂で食事がとれない日も数日あった。

二月六日には、研修の中断と前倒しでの帰国が決定したが、その時には、すでに日本行きの飛行機の多くが運休となっていた。帰国便は、二月一四日の上海経由便に決まったが、航空券が取得できたのは、その二日前だった。

すべての方のお名前は紙幅の関係であげることができないが、帰国までの間、多くの方に心配の連絡をい



写真3 上海浦東国際空港内の様子
(2020年2月14日)

ただき、本当に励まされた。帰国の当日は、各所で体温や証明書の確認があり、関西国際空港に降り立つまで、緊張の連続だった。

四、おわりに

当初の派遣期間は、令和元年一月八日(令和二年三月一八日)までの一六三日間であったが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、実際の滞在期間は、令和二年二月一四日までの一三〇日間となり、滞在期間が約一か月短縮となった。そのうち、実際に活動できた期間は一一三日間だったので、実質的には研修期間が

約二か月短縮となった。春節休み明けにも、様々な計画を立てていたが、それを全うできなかったことは、本当に残念であった。

それでも、中国における研修の日々は刺激的で、感動の連続であった。今後の活動に、研修で得た経験を活かしていきたいと思う。

最後に、研修の機会を与えてくださった国際課および榎原考古学研究所の関係者の皆様、現地でお世話くださった西北大学文化遺産学院および陝西省考古研究院の関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

附属博物館関連展示案内

◎附属博物館蔵品巡回特別展

『しきしまの大和へ』

—奈良大発掘スペシャル—

主催…附属博物館・

島根県立古代出雲歴史博物館

開催期間…令和三年三月一九日(金)

～五月一七日(月)

開催場所…島根県立古代出雲歴史博物館